

状態変化を表す「go + 名詞」句に関する一考察*

山 添 秀 剛

要 約

本論では、状態変化を表す「go + 名詞」句について考察する。「go + 名詞」句は、その形式上「go + 複数形名詞」句と「go + 無冠詞単数形名詞」句の二つに大別できる。まず、形式と意味の両面から「go + 複数形名詞」句と「go + 前置詞 + 名詞」句の関係を考察する。元来空間移動が基本義の「go + 前置詞 + 名詞」句が、メタファー拡張で状態変化も表すようになり、さらに前置詞が脱落して、「go + 複数形名詞」句が派生することを明らかにする。次に、「go + 無冠詞単数形名詞」句と「go + 形容詞」句の関係を考察する。そして、状態変化を表す「go + 無冠詞単数形名詞」句が、「go + 形容詞」句カテゴリー内で周辺事例であることを明らかにする。

また、両パターンが、「go + 前置詞 + 名詞」句や「go + 形容詞」句に比べ、生産性や使用頻度が低い点を確認し、さらに、前置詞を脱落させる理由が、「go + 形容詞」句から構文を継承することに加え、〈過程〉の認知的重要性が低いということに動機づけられていることも明らかにする。

キーワード：「go + 名詞」句、「go + 複数形名詞」句、「go + 無冠詞単数形名詞」句、メタファー拡張、構文継承、〈過程〉の認知的重要性

1 はじめに

本稿は、go bananasやgo apeのような、状態変化「～に [く] なる」を表す「go + 名詞」（以下、「go + 名」）句について考察する。状態変化を表す「go + 名」句は、その使用頻度や表現の多様性からすれば、決して生産的な表現ではない。むしろ、状態変化を表す他の表現群——「go + 前置詞 + 名詞」（以下、「go + 前 + 名」）句や「go + 形容詞」（以下、「go + 形」）句——の周辺現象といえる。⁽¹⁾ 本稿では、この周辺現象に着目し、この句の意味的・統語的な特徴について議論する。

構成は次の通りである。次節では、「go + 前 + 名」句と「go + 名」句の関連性を、3節では、「go + 形」句と「go + 名」句の関連性を、それぞれ形式と意味の両側面から検討する。4節で、結論をまとめる。

2 「go + 前置詞 + 名詞」句から「go + 名詞」句へ

次の(1)は動詞goを含む例で、典型的な用法からの広がりを表す。(1a)のような「空間移

動」を基本的意義（以下、基本義）とする go は、その特性の類似から、(1c) のような「状態変化」に意味を広げる。この拡張において、意味面では「空間移動」から「状態変化」への移行という二領域間の連続的な関係があり、これに対応して形式面では統語的な関連性が窺える。

- (1) a. go to the hotel
 b. go to bed
 c. go to sleep

まず、「空間移動」を表す go を確認する。先に (1a) のような例は go の基本義と言ったが、周知の通り、(1b) では、微妙な違いが形式と意味の両面で観察できる。(1a) は、名詞 hotel に定冠詞があることから、物理的な場所への空間移動を表し、go の典型例といえる。しかし、(1b) は、前置詞 to の後続名詞 bed が無冠詞不可算の要素と捉えられていることから、単に物理的な〈着点（目的地）〉への空間移動を示すにとどまらない。(1b) の bed は、この語自体で、単なる物理的な〈場所〉からそこで行われる〈プロセス〉（睡眠）に意味がメトニミー展開する。その結果、go to bed という句全体は、メタファーも合わせて働き、「ベッドに行く」という空間移動から「睡眠状態へ移行する」（寝る）という状態変化を意味するようになる。句全体がもはや「着点への移動」から「そこで行われるプロセスの開始」に意味を広げる。

(1a) と (1b) を比較すると、定冠詞の有無という形式面の差から、前者が典型的な空間移動を示し、後者はもはや純粋な空間移動とはいえない。(1b) は、「空間移動」を表す物理的領域と「状態変化」を表す抽象的領域の両方にまたがる現象といえよう。(1c) になると、形式面は (1b) と同じく「go + 前置詞 + 無冠詞不可算名詞」句であるにもかかわらず、もはや物理的現象ともいえなくなる。というのも、自明のことながら、名詞 sleep は、bed のような空間的な〈場所〉ではなく、そもそも「睡眠」という〈プロセス〉を表す抽象名詞であり、それに合わせ、この名詞に前置する go と to もそれぞれもはや純粋な空間的意義から抽象的意義に意味を広げるからである。

このように、「寝る」という行為を表す場合、(1b) のメトニミー・メタファーの協働による意味拡張を経た表現と (1c) のメタファーのみによるものがあり、両者には微妙な意味の（成り立ちの）差があった。この点を、もう一度確認すると、以下のように整理できる。

- (2) a. go + to + the hotel [空間移動 + 経路 + 着点]
 b. go + to + bed [空間移動 + 経路 + 着点
 状態変化 + 過程 + 結果状態 (プロセス) ⁽²⁾]
 c. go + to + sleep [状態変化 + 過程 + 結果状態 (プロセス)]

それぞれの例の右側に、領域内での意味要素を語ごとに対応させた。(2a)の例は、その意味要素から分かるように、すべての語が《空間領域》に属する。逆に、(2c)の例は、その意味要素から、すべての語が《抽象領域》に属し、メタファー展開していることが分かる。(2b)の例は、いわばその中間例である。bedという語は、本来物理的な〈場所〉を表すので、《空間領域》の意味を背景に醸し出ししながら、この句のなかでは、先に見た通り、メトニミー展開し、抽象的〈プロセス〉を表すことから、この句全体では状態変化という《抽象領域》が前景化していることが分かる。このように、(2a)から(2c)に向かって、意味に対応する形式の変化が確認できる。

次に、(3)を見よう。これらは、(1c) [= (2c)]と同じく、意味面では、もはや完全に〈状態変化〉を表す。形式面では、統語的関連性が観察できる。

- (3) a. go into a jealous rage
 b. go out of one's mind
 c. go places
 d. go bananas

まず、(3a, b)を見よう。両者とも形式は「go + 前 + 名」句である。(3a)は「嫉妬の怒りを起した状態に移行する」(嫉妬でかっとなる)を、(3b)は、「正気からそうではない状態に移行する」(気が変になる)を表す。それぞれ「立体空間の中に入る」「立体空間の中から出る」という空間移動から、「ある状態になる」「ある状態から(別の状態に)変わる」という状態変化に意味を広げる。

次に、(3c, d)を見よう。理由は次節で論ずるが、双方前置詞が脱落し、「go + 複数形名詞」(以下、「go + 複名」)句になる。(3c)は、「成功する」を表す。頻度的には、William is a young man who is definitely *going places*. (LDOCE⁽³⁾)のように、進行形になることが多く、その場合「将来成功する」「前途有望である」を示す。

go placesが句全体の意味として「成功する」という抽象的な意義にいたるには、goの基本義とplaceのシネクドキ展開した意義が関わると予想できる。つまり、placeという語は、単なる「(空間的な)場所」(Keep your valuables in a safe *place*.)の意義から特に「うってつけの場所」(The conservation area is a *place* for wild plants and insects.)の意義へ意味が限定的になる(cf.『多義ネット』)。よって、go to placesという句で、「〈人が〉うってつけの様々な場所に行く」を表せる可能性がある。そして、その前提として「成功する」必要があるという因果連鎖に基づき、〈結果〉から〈原因〉へ意味がメトニミー展開する。しかも、その際に、(3a, b)のような「go + 前 + 名」句というパターンとは異なり、何らかの理由で前置詞toが脱落することになる。

実際、go placesには、「成功する」という意義の他に、「様々な場所に行く」「旅をする」という空間移動を表す意義もある。前置詞が脱落した形式においてすら、空間移動の意義が残存する

背景には、この句の意味の造形の根本に空間用法がある可能性を示唆して興味深い。

(3d)は、「興奮する」を表す。文脈により、「怒り」「熱狂」「狂気」を表す。例えば、*She went bananas when I said I was going to leave the job.* (NODE) など。(3c)と同様に、何らかの理由で前置詞が削除されたと考え、元々は*go to bananas*だったことになる。「バナナの所へ行く」がなぜ「興奮する」を表すようになったのか。日本語でも、「油揚げ」が「きつね」の好物であるという民俗知識から、「きつねうどん」というメトニミー表現が成立するように、「バナナ」が猿などに代表される「類人猿」の好物という民俗知識が背景知識として関係するようだ。この可能性を探るのに、類義表現の*go ape*も合わせて考察しよう。

事例は、*Your parents'll go ape when they find out you've taken the car without asking.* (CIDE) など。(3d)の*go bananas*が「go + 前 + 名」句と連続するのに対し、*go ape*という表現は、次節の通り、むしろ「go + 形」句と連続すると考えられる。というのも、*bananas*が複数形で、不定だが具象的な個物を指すのに対し、⁽⁴⁾ *ape*は無冠詞不可算名詞扱いで具象的個物ではなく抽象的性質を示すからである。前置詞*to*を補い*go to bananas*が「バナナの所へ行く」を本来空間的に意味していた可能性はあっても、*go to ape*ではその形式からもはや空間移動は意味しえない。⁽⁵⁾つまり、*go ape*は、*go crazy*や*go mad*と同じく、もはや*go*も*ape*も空間的要素ではなく、*go*は「状態変化」を表し、*ape*は「猿のような気質」(興奮状態)に意味を広げる。このように、*go ape*は「猿のような興奮状態になる」ことを表す。

*go bananas*にもどろう。*banana*という語の背景に、「猿の好物」という民俗知識⁽⁶⁾を読みとれば、前置詞*to*を補った*go to bananas*が「(好物の)バナナに飛びつく」という空間移動の意味合いを帯びることが理解できる。ここから、形式面で*to*が脱落するとともに、*go bananas*の意味が〈結果〉から〈原因〉へメトニミー展開する。すなわち、猿が「バナナに飛びつく」という〈結果〉になるには、好物のバナナを見つけることで「興奮状態になる」という〈原因〉があるからであり、この因果連鎖がこの表現の意味拡張を支える(ちなみに、この意味展開パターンが、先に見た(3c)の*go places*と同じ点も興味深い)。

と同時に、*bananas*という複数形名詞が単独で、個物としての「果物」を表すとともに、すでにメタファー的な意味としていわば「マイナスイメージの人(の集団)」を意味しているとも考えられそうである。この負の意味は、「黄色」に伴う人種の侮蔑が根底にあるかもしれない。同様のことが、後で見る(4)の他の例文にも当てはまる。*bats*は動物「コウモリ」が持つ悪い連想、*bonkers*や*crackers*は「ボン」(*bonk*)や「バン」(*crack*)という物が弾ける擬音、*nuts*は人の頭を「木の実」に見立てることで「能無し」を表すなど。これらの「go + 複名」句は、空間移動を醸し出しながらも、すでに「悪い状態への変化」を重層的に意味しているとも捉えられそうである。

*go bananas*は、意味面では*go ape*と近く、最終的には双方が「興奮状態になる」ことを表す。しかし、この意味にいたる造形が異なることを確認した。つまり、*go bananas*は「バナナの所

へ行く」という空間移動の意義が根底にあり、かつbananasがもつ「負の集団」のイメージが作用して意味形成がなされるのであり、決して「go + 形」句からの連想だけで「バナナになる」という状態変化が関わることはない。これに対し、go apeは「類人猿の所へ行く」という空間移動の意義が根底にあるわけではなく、「go + 形」句からの連想だけで「猿のようになる」という状態変化を表す。

この点は、goに後続する名詞の形式の違いに反映される。物理的な空間移動が根底で意味の下支えをするgo bananasの場合は、その目的地は具体的な場所・個物でなくてはならず、この場合複数形名詞の形式になる。go apeの場合は、go crazyのような「go + 形」構文と関連し、この場合のapeは物理的個物ではなく抽象的性質を表す形容詞に極めて近いといえ、無冠詞不可算名詞の形式となる。

go apeに代表されるパターンについては次節で考察するので、ここでは最後に、go bananasに代表される「go + 複名」句のパタンを確認する。「go + 複名」句は、一定の意味傾向を形成する。次の（4）を見よう。

- (4) a. She *went bananas* when I said I was going to leave the job. (NODE)
 b. Yorkshire experts *go bats* for new species ⁽⁷⁾
 c. I'll *go bonkers* if I have to wait any longer. (OALD)
 d. If Luke wasn't here I'd *go crackers*. (NODE)
 e. I'm going to *go nuts* if I don't find a new job soon. (LDOCE)

(4a) は先に見たので、(4b) から。親指サイズの珍しいコウモリが英国でも見つかるという記事で、「新種に興奮」と見出しを打つ。「興奮する」という意味の成句として敢えてgo batsを使い、動物「コウモリ」と意味を重ねている。(4c) のgo bonkers, (4d) のgo crackers, (4e) のgo nutsは、すべて「気が変になる」を意味する。また、go bugsやgo starkersも類例といえよう。

(4) は、いずれも「〈人が〉(通常状態から)興奮状態へ変化する」を意味する。その興奮状態は、文脈により、「怒り」(4a),「熱狂」(4b),「狂気」(4c-e)になる。このように、「go + 複名」句では、その事例数から、「〈人が〉(通常状態から)興奮状態へ変化する」が主要な意味傾向といえる。

しかし、この句はこれ以外の意味も若干ながら示す。次の（5）を見よう。

- (5) a. I suppose you usually *go beddy-byes* at 10. (BNC)
 b. The film industry has been *going great guns* recently. (NODE)
 c. You should have never *gone partners* with him.
 d. William is a young man who is definitely *going places*. (LDOCE)
 e. Why don't we *go shares* on lunch? (CIDE)

(5a) の go beddy-byes は「おねんねする」、(5b) の go great guns は「大成功する」、(5c) の go partners は「手を組む」を表す。(5d) は (3c) での説明の通り。(5e) の go shares は、このように金銭を支払う場合は「割り勘にする」だが、金銭をもらう場合は「山分けにする」を表す。⁽⁸⁾

(5) のような例外はあるものの、「go + 複名」句の主要な意味傾向としては、その事例数から (4) に見た「興奮状態への変化」が大きなまとまりをなす。もちろん、(5) の場合も、元来「ベッド」「大砲」「相手」「場所」「取り分」などが存在する「場所へ行く」という空間移動の意義が根底にあり意味形成がなされる点が重要である。物理的な空間移動が根底で意味の下支えをするからこそ、その目的地は具体的な場所・個物でなくてはならず、go の後続要素は複数形名詞が指定される。決してすでに状態変化表現と化している「go + 形」句からの連想だけで状態変化の意味を帯びるわけではない。

また、BNC で使用状況を確認すると、「go + 複名」句の例は、いずれも使用頻度が低いことがわかる。「go + 複名」句の例の中で、その事例数から主要な意味傾向をなす (4) において最も使用頻度が高いのは go bananas だが、それでも辞書の記述では informal や slang のラベルを免れることはできない。(5) では、go places の使用頻度が高いが、やはり informal のラベルをつける辞書が多い。go bananas や go places 以外の例は、ほとんどの辞書がそもそも成句として記載していないことも多い。このことからすると、「go + 複名」句は、依然として限定的にしか使用されておらず、その生産性も極めて低いことが窺われる。

本節では、「go + 前 + 名」句と「go + 複名」句の例を観察した。意味面では「空間移動」から「状態変化」への二領域間の連続的拡張関係が観察でき、それに対応して形式面では統語的な関連性があることを確認した。

3 「go + 形容詞」句から「go + 名詞」句へ

前節では、「go + 名」句、さらにいえば、「go + 複名」句が、形式と意味の両面で「go + 前 + 名」句とどのような関係にあるのかを考察した。本節では、「go + 形」句と「go + 名」句の関係を形式と意味の両面から検証する。まず、次の (6) を見よう。

- (6) a. go + to + the zoo [空間移動 + 経路 + 着点]
 b. go + crazy [状態変化 + 結果状態]
 c. go + ape [状態変化 + 結果状態]

(6a) は、前節でも見たように、go の空間移動用法である。この基本義からメタファーを介して (6b) の状態変化用法へ意義が展開する (cf. 山添 2004: 80-82)。このような「go + 形」句の生産性は比較的高く、その意味傾向も豊かに広がる。本節で問題にしたいのは、(6c) のパターンである。

(6b) と (6c) を比較すると、意味面ではともに状態変化を表すのに対し、形式面に差がある。自明ながら、補語の位置に出現する要素が形容詞か名詞かの差である。go は、become などとは異なり、通常補語として名詞を自由にとれない (Quirk *et al.* 1985, 『動詞辞典』)。しかし、それほど生産性は高くないにせよ、前節で見た「go + 複名」句に加え、(6c) のような「go + 無冠詞単数形名詞」(以下、「go + 無冠単名」) 句のタイプも見られる。⁽⁹⁾

(6c) のような「go + 無冠単名」句と (6b) のような「go + 形」句の関連性について、ここで注目したいのは、統語構造と意味構造の関係である。さらにいえば、形容詞や名詞などの文法範疇とその意味範疇の関係である。文法範疇と意味範疇の対応関係は、様々な言語理論で諸説が提示されている。ここで確認しておきたいのは、文法範疇が内部的に典型性を保つ点と文法範疇が意味範疇に認知的に動機づけられている点についてである。

文法範疇の内部構造の典型性については、Ross (1972) が明快に解説する。動詞、形容詞、名詞という文法範疇は、不連続で固定的な内部構造ではなく、連続性に近い状態を示す、という。このような文法範疇の内部構造を category squish と呼び、以下のように表す (Ross 1972 : 316)。

(7) Verb > Present participle > Perfect participle > Passive participle > Adjective > Preposition (?) > “adjectival noun (e.g., fun, snap)” > Noun (下線や疑問符は原文)

下線が施された、動詞、形容詞、名詞といった基本的な文法範疇と他の文法範疇は、明確に区別できるものではなく、かといって、完全に連続的なものでもない。(7) に示された、8つの下位範疇からなる文法範疇全体は、いわば、外部から力を加えられたように内部の境界線をぼかしながら押しつぶされている (squishy) 状態だという。本論との関係で重要なのは、形容詞と名詞の間に、adjectival noun という範疇を設け、「形容詞のような名詞」の存在を想定する点である。典型的な名詞と典型的な形容詞の間に、双方の周辺事例といえる存在がカテゴリーとして存在する、と理解できる。

次に、文法範疇と意味範疇の関係については、文法を意味の観点から定義する姿勢が注目される。このような姿勢は、認知言語学の基本的な考え方である (Lakoff 1987, Langacker 1987, Taylor 2003 など)。しかし、Lyons (1977 : 438-452) がすでに示唆に富んだ分析をする。文法構造は意味構造が (部分的に) 決定する (さらに厳密には、この意味構造は存在論的範疇が決定する) という可能性を指摘する。つまり、文法を捉える際に意味的側面の重要性を強調する。ただし、意味的 (存在論的) に不確定な場合は、個別言語の文法範疇が独自に関与する場合も指摘する。例えば、〈状態〉を表す語がどのような文法範疇 (または意味範疇) に組み込まれるかは、言語次第である。〈状態〉を動詞 (または〈動作〉) の範疇に入れる言語もあれば、形容詞 (または〈性質〉) の範疇に入れる言語もあり、また名詞 (あるいは〈モノ〉) の範疇に組み込む言語もある。また、

複数の範疇にまたがる場合もある（例えば、英語の know や peace など）。よって、意味構造と文法構造の間には、完全な対応関係はないものの、典型事例においては高い対応関係があり、周辺事例においては齟齬をきたす、といえる。

Ross (1972) の指摘は、カテゴリーがプロトタイプを中心に非均質的に広がると捉える認知言語学的なカテゴリー観に通じる。英語などのように、文法範疇において、名詞と形容詞がカテゴリーとしてそれぞれ独立に存在する場合、名詞カテゴリー内ではより名詞らしい典型的な名詞からそうではない名詞に成員が広がり、形容詞カテゴリー内では形容詞らしい典型的な形容詞からそうではない形容詞に成員が広がる。この二つのカテゴリーがそれぞれの周辺で重なる部分では、周辺事例として、典型的な名詞とも典型的な形容詞ともつかない中間的な成員が存在する、と捉えられる。となると、(6c) で見た go ape の ape は、もはや具象的個物ではなく抽象的性質を表すがゆえに無冠詞不可算名詞扱いになることと考え合わせると、形容詞と名詞の中間的な成員と位置づけられても不思議ではない。⁽¹⁰⁾

また, Lyons (1977) の指摘は、なぜ go ape のような「go + 無冠単名」句では、前節で見た「go + 複名」句と同様に、〈過程〉を示す前置詞が脱落するのか、を考えるうえで示唆に富む。その理由は、ひとつには、構文としての「go + 形」句（もしくは、より上位の自動詞結果構文）から「状態変化」という意味と対になるその形式を継承するという形式上の根拠が挙げられる（cf. Goldberg 1995）。しかし、より重要なことに、意味構造が文法構造を認知的に動機づける点からも説明できる。つまり、「空間移動」の場合は、物理的な運動という観点から、起点・経路・着点スキーマにおいて〈着点〉の次に（〈起点〉や）〈経路〉も我々の認知上際立つ要素になる可能性がある。しかし、メタファー拡張した「状態変化」の場合は、重要なのはあくまで〈結果状態〉であって、〈経路〉から拡張した〈過程〉に認知的重要性が帯びることは少ない。したがって、「go + 無冠単名」句や「go + 複名」句の場合には、「go + 形」句と同様の形式に、つまり前置詞が脱落した状態になると考えられる。

しかしときに、この〈過程〉が認知的に際立つ場合、後続要素が形容詞（相当語）といえども前置詞が生起する。

- (8) a. The light *went from green to red*.
 b. Harry *went from elated to depressed*. (Jackendoff 1990 : 25)
 c. When she arrived, things just *went from bad to worse*. (LDOCE)
 d. The temperature *went from cold to hot*.⁽¹¹⁾

我々の認知を反映する意味構造が文法構造を動機づける所以である。

以上の議論を踏まえ、改めて(6)で見た、「go + 無冠単名」句のパターンと「go + 形」句のパターンの関連性について考える。まず、「go + 無冠単名」句の実例を意味傾向別に確認する。この意

味傾向の類型については、「go + 形」句の意味傾向を例証した山添（2004:106-114）を参考にする。

まず（9）を見よう。（9a-c）の共通の意味傾向は、「〈人が〉（通常状態から）興奮状態になる」という心理的側面である。この場合「興奮状態」とは、「怒り」（9a, b）や「熱狂」（9c）などの状態を含意し、一時的に通常の心理状態からいわば「精神的に逸脱した状態」を表す。

- (9) a. Dad, don't *go aggro* on me. ⁽¹²⁾
 b. Your parents'll *go ape* when they find out you've taken the car without asking. (CIDE)
 c. Women *go cuckoo* over bargain sale ⁽¹³⁾
 d. My computer's *gone haywire*. (LDOCE)

(9d) では、主語は人から物に拡張し、go haywireは「機能的に逸脱した状態への変化」を表す。この意味は、壊れかかった物を干し草用の針金で補修したことに由来する。つまり、比喩的に「〈物事が〉仮ごしらえにされた」を意味し、「壊れている」ことを表す。

（9）に見られる意味傾向は「go + 形」句にも対応し、その事例はより多様である。次の（10）で確認しよう。

- (10) *go + ballistic, batty, berserk, buggy, crazy, funny, insane, mad, mental, nutty, peculiar, postal, potty, spare, wild, etc.*

事例の多様性は、この句の生産性の高さを裏づけるといえる。また、生産性の高さと相関して、BNCでgoとその後続要素の共起頻度を見るかぎり、（10）に見られる「go + 形」句の使用頻度の方が（9）に見られる「go + 無冠単名」句よりも圧倒的に優勢である。特に、go mad, go crazy, go wildがよく使われる。

（9）の意味傾向は、前節の（4）で見た「go + 複名」句でも主要な地位を占めていた。よって、「興奮状態への変化」という意味は、「go + 名」句全体から見ても重要だといえる。

次の（11）の意味傾向は、「〈人が〉（通常状態から）身体的（生理的）に逸脱した状態になる」といえる。

- (11) a. Whenever I talked about his past life, he would *go beetroot*. (CIDE)
 b. All heroin addicts *went cold turkey*. (BNC)

(11a) のgo beetrootは「真っ赤になる」、(11b) のgo cold turkeyは「禁断症状になる」を意味する。(11b) は特殊な慣用表現だが、(11a) のような顔色を含めた「色の変化」は意味傾向として「go + 形」句の実例にも顕著に見られる。例は、次の通り。

- (12) *go + black, blue, brown, crimson, dark, green, grey, pale, pink, purple, red, scarlet, white, etc.*

やはり生産性は、(11)に見られる「go + 無冠単名」句よりも(12)に見られる「go + 形」句の方が高い。また、使用頻度も、BNCで調べると、*go white*や*go red*を筆頭に「go + 形」句の方が高いことが分かる。

(11a)と(12)は、両者ともに生理的な理由で「顔色に変化する」ことを意味するが、若干の違いもある。(12)の場合は、直接的に顔色などの色を形容詞として明示するのに対し、(11a)はあくまで「ビート(のよう)になる」と言っている点である。この野菜がもつ最も際立つ特性はその「真っ赤な色」であり、「ビート(のよう)になる」といえば「赤くなる」に意味的に等しい。ここには「〈もの〉で〈特性〉」を表すメトニミーが関与する。

次の(13)は、主語が「人」から「組織」に変わり、どちらも「〈組織が〉(通常状態から)破綻状態になる」を意味する。ただし、(13a)の*go belly up*と(13b)の*go bankruptcy*とでは、意味の造形が異なる。

- (13) a. The business *went belly up* after only six months in operation. (CIDE)
 b. The firm *went bankruptcy* because it had been involved in too many mergers and acquisitions and had too high a level of investment.

(13b)の*bankruptcy*が、文字通り直接的に「破綻状態」を表すのに対し、(13a)の*belly up*は少し複雑で、メトニミーとメタファーが関わる。*go belly up*は、元来「〈魚などが〉腹を上にして浮く」という〈結果〉で「〈魚などが〉死ぬ」という〈原因〉を表していた。例えば、*Tens of thousands of fish, crab and shrimp went belly up in the summer in a Louisiana bayou.*のように。ここから、「動物の死」と「企業の倒産」の間の特性類似に基づき、「〈組織が〉(通常状態から)破綻状態になる」という意味にメタファー展開する。

この意味傾向にも次の(14)のように「go + 形」句の実例との対応が見られ、やはり「go + 無冠単名」句と「go + 形」句の関連性について示唆的である。

- (14) *go + bankrupt, broke, bust, insolvent, etc.*

ただし、生産性は(10)や(12)が表す意味傾向の場合のようには圧倒的でないものの、やはり使用頻度は、BNCでみるかぎり、*go bust*や*go bankrupt*を筆頭に「go + 形」句の方が高いことが分かる。

以上の3つの意味傾向は一言でいえば、「(通常状態から)異常状態への変化」である。主語が

人の場合なら、「身体」「精神」「活動」などにおいて何らかの「逸脱」現象が生じることを表す。

次の(15)で見る「go + 無冠単名」句は、「異常状態への変化」ではない。かといって、「通常状態への変化」でもない。これらはそのどちらでもない「中立状態への変化」を表す。「中立状態への変化」の「中立状態」とは、「goに後続する形容詞自体では、それがプラス／マイナスいずれの意味合いを帯びるのか判断がつかず、その決定には文脈が大きな役割を果たす」（山添 2004：109）場合をいう。

- (15) a. People should *go apprentice* in restaurants if they want to learn how to cook.
 b. He *went bail* for Oscar Wilde. (BNC)
 c. New Zealand to *go DTV* with RFS⁽¹⁴⁾
 d. He covered the Northern Ireland scene for the BBC here for many years, and *went freelance* four-and-a-half years ago. (BNC)
 e. Taliban '*go guerrilla*' in Pakistan⁽¹⁵⁾
 f. This season, the scoring system is *going high-tech* thanks to a joint venture. (BNC)
 g. Tranmere Rovers *went nap* to inflict a heavy 5-1 defeat on West Ham. (NODE)
 h. The star *went nova* 157 years ago. (BNC)

(15a) の *go apprentice* は「弟子になる」、(15b) の *go bail* は「保釈保証人になる」、(15c) の *go DTV* は「デジタルテレビ化する」、(15d) の *go freelance* は「フリーになる」、(15e) の *go guerrilla* は「ゲリラ化する」、(15f) の *go high-tech* は「ハイテク化する」、(15g) の *go nap* は「5得点をあげる」、(15h) の *go nova* は「新星になる」を表す。それぞれの句自体はいずれも「異常状態への変化」でも「通常状態への変化」でもないことがわかる。

このように、「go + 無冠単名」句には「中立状態への変化」を表す実例もあり、この意味傾向はやはり「go + 形」句の場合と対応する。

- (16) *go + capitalist, Labour, vegetarian, coeducational, decimal, metric, global, nationwide, private, public, etc.*

以上の考察から明らかなように、「go + 無冠単名」句は「go + 形」句と形式面では連続性があり、かつ意味面ではその傾向に類似性が確認できた。また、「go + 無冠単名」句は「go + 形」句に比べ、実例数が圧倒的に少なく、生産性や使用頻度が低いことも窺われた。よって、状態変化を表す「go + 無冠単名」句は、「go + 形」句のカテゴリー内における周辺事例だといえる。

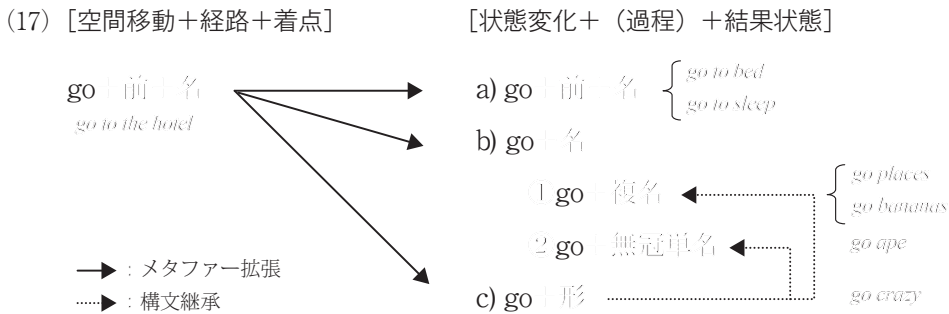
4 結論

本論では、状態変化を表す「go + 名」句について考察した。「go + 名」句は、その形式上①「go + 複名」句と②「go + 無冠単名」句の二つに大別できた。

まず、形式と意味の両面から「go + 複名」句と「go + 前 + 名」句の関係を考察した。元来空間移動が基本義の「go + 前 + 名」句が、メタファー拡張で状態変化も表すようになり、さらに前置詞が脱落して、「go + 複名」句が派生すると考えられた。物理的な空間移動が根底で意味の下支えをする分、その着点は具体的な場所・個物でなくてはならず、形式上goの後続要素に複数形名詞が指定されることがわかった。ただし、すでにこの複数形名詞が単独でメタファーの意味を帯びる可能性もある。

次に、「go + 無冠単名」句と「go + 形」句の関係を考察した。その結果、状態変化を表す「go + 無冠単名」句が、「go + 形」句のカテゴリー内での周辺事例だとわかった。その理由は、この句が「go + 形」句と、形式面で連続性があり、意味面でその傾向に類似性が確認できた点にあった。

また、両パタンの実例数は現時点では40種弱にすぎず、「go + 前 + 名」句や「go + 形」句に比べ、生産性や使用頻度が低い点も確認できた。さらに、両パタンが前置詞を脱落させる理由は、「go + 形」句から構文を継承することに加え、〈過程〉への認知的重要性が低いということに動機づけられていることもわかった。以上を図式的にまとめると下記のようになる。



最後に、本論では動詞をgoに限定して考察したが、状態変化を表す「動詞 + 名詞補語」句のパタンには動詞は他にも確認できる。例えば、(18)などが挙げられる。

- (18) a. *fall prey [victim] to*
 b. *run errands for/ run riot*
 c. *turn turtle*

これらの検討に関しては、今後の課題として稿を改めたい。

注

- *本稿は、2011年5月26日に行われた第47回札幌学院大学言語学談話会での発表が下敷きになっている。その際、多くの貴重なご意見・ご助言を頂戴した。この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。また、同僚である Kenlay Friesen, T. P. P. Grose, Don Hinkelman, Richard Ide, Martin Murphy, Joel Rian の各氏からはインフォーマントとして例文について貴重なご意見・ご判断を頂いた。心より感謝申し上げたい。そして、同僚の眞田敬介氏からは、草稿の段階で有益なご意見を数多く頂いた。併せて感謝申し上げたい。もちろん、本稿のあらゆる不備は、筆者の責任である。
- (1) 山添 (2004) では、状態変化「～に [く] なる」を表す「go + 形容詞」句について考察した。go に後続する形容詞は245種を確認し、意味傾向に基づき分類・整理した。本稿で扱う「go + 名詞」句における名詞の種類については、現時点で確認できたのは40種に満たない。
 - (2) 「結果状態 (プロセス)」という表記について確認する。go to bed の bed は、物理的な「ベッド」(場所) から抽象的な「睡眠」(プロセス) に指示がずれることが、無冠詞不可算扱いという形式から明らかなことはすでに本文で見た。ここには「(場所) で (プロセス)」を表すメトニミーが働く。この句の場合、bed という語のみを見れば、厳密には、「睡眠」という抽象的 (プロセス) を意味する。そこにさらにメタファーも働き、句全体で「睡眠というプロセスへの移行」を表すようになる。この「プロセスへの移行」は、より広い観点から、「状態への変化」とも捉えられる。本稿では、他の論点との整合性や表現の簡潔性から、「睡眠というプロセスへの移行」を「睡眠状態への変化」と表現する。
 - (3) 辞書やコーパスの名称には略語を用いる。正式名称との対応は、末尾の「辞書・コーパス」を参照。
 - (4) その統語的振舞いから bananas やこれに類する (4) における他の go の後続要素を「形容詞」として登録する辞書もある (例えば、CIDE, LDOCE, Macmillan など)。実際の使用状況を見ると、go absolutely [completely, totally] bananas のように bananas が統語的に形容詞とみなされる場合も、go crazy [freakin(g)] bananas のように名詞とみなされる場合もあり、判断に揺らぎがある。また、筆者のインフォーマントの判断にも揺らぎがあった。しかし、本稿では、(5) の例との整合性に加え、具象的個物・場所としての本来的な〈着点〉の意味を重視し、あくまで「名詞の複数形」として論じる。
 - (5) もちろん go to ape で「猿の肉がある所へ行く」を表す場合も考えられるが、本稿ではこのような特殊な解釈は議論から除外する。
 - (6) 「バナナは猿の好物か」に関する動物行動学や生態学などの専門的判断については、残念ながら筆者は不案内だが、アメリカの Curious George やイギリスの Jingle Jungle Monkey など、少なくとも英語圏における絵本や子供向け番組などを見るかぎり、このような民俗知識が根づいていると思われる。たとえ科学的な専門知識とは矛盾する内容であったとしても、歴史的・文化的な理由などでそう信じていること自体が重要になる。このような民俗知識 (folk knowledge) は、背景知識として言葉の意味に大きな影響を与える。
 - (7) Yorkshire Post (ウェブ版)、2010年5月17日の記事の見出し。以下の用例でとくに注のないものは、Google 検索にて得たデータで、母語話者によるチェックを受けている。
 - (8) He thinks I'm *going halves* with him. (BNC) は類例。go halves [halfsies, halvrs, halvies] は「折半する」を表す。これらが go Dutch や go half and half [fifty-fifty] などの「go + 形容詞」句と対応する点も興味深い。
 - (9) ただし、このパターンには「go + 様態・強調副詞句」のタイプも存在する。例えば、They're going to have to go *cap [hat] in hand* to the government. (BNC) や Why not go (the) whole hog? など。cap [hat] in hand は「うやうやしく」、(the) whole hog は「徹底的に」という副詞句。しかし、本論で議論する go の後続名詞は、このタイプを除外し、元来「着点」であったがゆえに、「結果状態」へメタファー拡張するタイプに限定する。また、go the (full) distance や go your own way のような後続要素に限定詞が存在するタイプも議論から除外する。
 - (10) 実際の使用状況を見ると、go absolutely [completely, totally] ape のように ape が統語的に形容詞とみなされる場合も、go great [crazy] ape のように名詞とみなされる場合もあり、判断に揺らぎがある。また、筆者のインフォーマントの判断にも揺らぎがあった。これらは、ape という名詞が形容詞性を獲得している証拠といえる。もちろん、adjectival noun という範疇自体もプロトタイプカテゴリーといえ、「形容詞のような名詞」というカテゴリーにもその成員に段階性が想定できる。そういう意味では、adjectival noun では、形容詞性をより強く獲得している fun などの語が典型例といえ、ape はその周辺に存在することになる。また、注の (13) にあるように、同じく本来動物を表す cuckoo という語の場合は、「動物」としての個物的意義と「興

奮状態」としての心理的意義を区別するために、名詞と形容詞の両方のラベルを用いる辞書が多いのも示唆的である。

- (11) Daily Mail (ウェブ版), 2011年5月12日の記事より。
- (12) 米俗語。Los Angeles Times (ウェブ版), 2009年2月13日の記事より。また, NODEによると aggroは語源的に aggravation や aggression の省略形とのこと。
- (13) Daily Times (ウェブ版), 2007年10月7日の記事の見出し。cuckooの「興奮状態」の意義については, 形容詞として記載する辞書が多い(例えば, CIDE, LDOCE, NODEなど)。しかし, 同じく動物のapeとの差が不明瞭になるので, 本稿では名詞として扱う。
- (14) ニューージーランドの放送改善団体Radio Frequency Systems (RFS) による2007年6月11日のプレスリリース (ウェブ版) の見出し。
- (15) Bangkok Post (ウェブ版) に掲載されたAFPの記事の見出し。2009年11月19日。

参考文献

- Clark, Eve V. (1974) "Normal state and evaluative viewpoints." *Language* 50, 319-332.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2. Stanford: Stanford University Press.
- Lyons, John. (1977) *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ross, John Robert. (1972) "The Category Squish: Endstation Hauptwort." *CLS*8, 316-328.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 山添秀剛 (2004) 「移動動詞 come/go の意味ネットワークならびに状態変化用法に関する認知言語学的考察」大阪市立大学大学院文学研究科, 博士論文。

辞書・コーパス

- 『英語基本動詞辞典』第3版. 1981. 小西友七 (編). [動詞辞典]
- 『英語多義ネットワーク辞典』初版. 2007. 瀬戸賢一 (編集主幹). [多義ネット]
- Cambridge International Dictionary of English*. 1st ed. 1995. [CIDE]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th ed. 2009. [LDOCE]
- Macmillan English Dictionary*. 2nd edition. 2007. [Macmillan]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 8th ed. 2010. [OALD]
- The New Oxford Dictionary of English*. 1st ed. 1998. [NODE]
- The British National Corpus*. (URL : <http://bnc.jkn21.com/>) [BNC]

A Study on the 'Go + Noun' Phrase Referring to Change of State

YAMAZOE Shugo

Abstract

The purpose of this paper is to address the change-of-state uses of the 'go + noun' phrase. This phrase is divided roughly into two sub-phrases: the 'go + plural noun' phrase and the 'go + bare singular noun' phrase. First, we investigate the relation between the 'go + plural noun' phrase and the 'go + preposition + noun' phrase in terms of both their form and meaning. It is argued that the basic spatial use of the 'go + prep. + noun' phrase is metaphorically extended to its change-of-state use and losing its preposition, this phrase changes into the 'go + plural noun' type. Second, we deal with the relation between the 'go + bare singular noun' phrase and the 'go + adjective' phrase. It is illustrated that the 'go + bare singular noun' phrase is a peripheral member of the category of the 'go + adj.' phrase.

Moreover, this article demonstrates that both the 'go + plural noun' phrase and the 'go + bare singular noun' phrase are much less productive and frequent than the 'go + prep. + noun' phrase and the 'go + adj.' phrase. And we explore the possibility that the reason why these two types of the 'go + noun' phrase lose their preposition is motivated by the two facts: that the two types inherit from the 'go + adj.' construction and that the path of the "source-path-goal" schema, if construed metaphorically, is usually less important than the source or the goal in terms of our cognitive salience.

Keywords: the 'go + noun' phrase, the 'go + plural noun' phrase, the 'go + bare singular noun' phrase, metaphorical extension, constructional inheritance, cognitive saliency in the "source-path-goal" schema

(やまぞえ しゅうごう 札幌学院大学人文学部准教授 英語学専攻)